【研究論文】

高機能自閉症と思われる事例への援助

－保育園におけるTEACCHの活用－

服　部　次　郎

要　旨　近年マスコミなどでも取り上げられるようになってきた広汎性発達障害であるが、本論文ではそのような障害のある児童の保育園での成長ぶりについて論じた。このような児童に対する治療教育の面で有効であると注目されているものの中にTEACCHプログラムがある。これを日々の保育場面に活用し、分かりやすい環境設定のもと、見通しのもてる働きかけを３年間にわたり継続した結果、児童に大きな成長が認められたものである。

はじめに

近年現場の保育者より、保育園や幼稚園等において「気になる児童」が増加していると聞く機会が多くなった。入園した時点では、他の児童も落ち着かないことがあり気づかれにくいが、他の児童が落ち着いてきて集団活動の流れになじみ始めても、集団から離れていったり、自分の興味のある活動ばかりを続けているといったことで、担当の保育士も気になり始めるという。そのような「気になる児童」の一例として、「広汎性発達障害」(1)（高機能自閉症［アスペルガー症候群］も含む）の診断を受けた事例Ｒ君を紹介する。Ｒ君の気になる行動を具体的にみてみると、保育士の指示に従えない、給食の時など偏食が激しい、トイレのスリッパの色にこだわり、決まった色のスリッパをはけないとパニックを起こす、などといった特徴を示し、保育を進める担当保育士にとって大きな悩みの種になっているといった具合である。

このような事例に対する治療教育の点で近年注目されているのがTEACCHである。TEACCH(2)とは、“Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped CHildren”の略で、「自閉症とその関連する領域にあるコミュニケーション障害の子どもたちの治療と教育」という意味である。

TEACCHは、アメリカ合衆国のノースカロライナ州で、Ｅ・ショプラー教授を中心に1960年代後半に研究がはじまり、親の強い希望を受けて、1972年に「公立」の治療教育プログラム、支援システムとして全州規模でプログラムが展開、実施されてきている。その州に在住する成人の自閉症者の97％もの人たちが「何らかの形」で「地域社会の中」で生活しているということで、その有効性が実証されているのである。このプログラムでは、①親を共同治療者として位置付ける、②確かな診断と綿密な評価、それに基づく治療教育プログラムを提示する、③幼児期から常に大人の生活を見越して一貫した治療教育プログラムを行う、などに重きをおいている。

このプログラムにおいては、自閉症の人たちに共通に見られる「障害特性」（例えば言葉で言われると混乱しやすいが、視覚的・具体的にいうと分かりやすい）や、一人ひとりの「機能水準（発達水準）」と「個性」を知ること、できないことや弱いところを見極めるだけでなく、「得意とすること」や「興味も示すもの」に注目することなど、が重視される。また、働きかける方法を一定にしたり、同じ場所を多目的に使わず同じ目的に使うなどして空間を「構造化」し、「分かりやすい環境」を整えることで「自立できるように支援する」のである。

このような考え方を、保育の場面において実践的に活用したある保育園を取り上げ、どのような具体的対応が効果的であったのか、効果的であった場合、その理由は何か、などを検討することで、今後も増加すると予想される広汎性発達障害の児童、特に高機能自閉症の児童の保育をすすめる上で参考になることを願うものである。

Ⅰ　目　的

本研究では、上で述べたように、自閉症児・者への治療教育の分野で大きな効果をあげているといわれるTEACCHの考え方に出会い、年度の途中からではあるが、ある一人の児童の保育場面にこの手法を活用したＴ保育園での実践について検討する。特に筆者がこの児童について保育園から相談を受け定期的に支援（相談・助言）をする中で、必要に応じてＴ保育園で直接本児の行動観察もした上で、Ｔ保育園での、また担当保育士のどのような具体的対応が本児の発達にとって有効であったのかを、保護者との連携という面にも触れながら、明らかにする。

Ⅱ　方　法

事例検討方式により研究を行うものとする。自閉症の治療教育に有効といわれるTEACCHの考え方を活用し、保育実践を行なってきたＴ保育園における一つの事例（Ｒ君）をとりあげ、入園から退園までの３年間にわたる保育園での本児の状況と担当保育士の対応を中心に、保護者への対応も含めて検討する。特にＴ保育園の担当保育士の経過観察記録を中心に取り上げ、出来るだけ具体的に、また詳しく検討していく。また筆者の保育園での本児の行動観察結果も加えることで、より広い観点から事例の検討をすすめた。

Ⅲ　事例の概要

対象児童：Ｒ（男）、３歳（保育園年少組に入園した時点の年齢）

主　　訴：（保育園より）保育園での保育が本児にとって適切なものかどうか、助言してほしい［保護者からも後日、専門機関より助言を受けることについて了解を得ている］

家　　族：両親、母の妹（叔母）、母方祖父母、祖父方曾祖母、本児の姉２人の９人家族

生 育 歴：出産は正常分娩で体重は約3300ｇ。首のすわりは３か月、お座りは６か月、歩き始めは12か月であった。６か月乳児健診、１歳半健診とも異状なしということであった。ただし３歳児健診では、言葉の遅れ、耳の聞こえについて指導があった。母も、姉２人よりも発達が遅れているようで、落ち着きもないと感じている。

診 断 歴：年長組になった年の１月に、医療の専門機関において児童精神科医より、「広汎性発達性障害」という医学的診断をうけている。

Ⅳ　児童の状況と保育士の対応状況およびその結果の考察について

（年少児）［平成Ｘ年４月～平成Ｘ＋１年３月］

（４～５月）

・単語/二語文は出るが、オウム返しが多い。本児の分かるように話をしたり、繰り返してみたりした。保育士の手をつかんだり、引っ張って思いを伝えることもある。

・視線は合わない。

・落ち着きはなく、絵本の読み聞かせや手遊びなどの一斉活動の時、保育室におれず、廊下に行ってしまう。泣くことが多い。

・遊びを次から次へと変えて、一つのことに集中していない。

・絵を描くことが好きで、楽しそうに一人で遊んでいる。時間のある限り描いている。

・泣いている時は、本児から抱っこやおんぶを保育士にねだるので、抱っこ、おんぶをし落ち着くようにした。

（10～11月）

・保育士の名前を言うようになる。

・一人遊び又は保育士と一対一で遊んでいる。他児が「いっしょにやろう」「入れて」と誘うとすごく嫌がるため、他児には「一人がいいんだって」等、話をするようにし、本児の気持ちを“代弁”し、他児にも理解してもらえるよう配慮した。

・小学校での運動会の練習には行きたがらず園の遊具で遊びたがり、他児とは一緒に行けない。そのため保育士と園に残り、少しの間遊具で遊ぶようにしたり園長と一緒に園で待つようにしたところ、その後、本人は小学校に行くことができた。

（12月～２月）

・生活発表会（劇遊び、表現遊び［ブロック遊び］、楽器、歌）の練習には参加しないことがほとんどで、怒っているが、ブロック遊びだけは、ブロックが好きで物を作り、何ができたかを発表することができた。これは練習の時から参加できた。

（３月）

・自分のしてほしいことは言いに来ることができるようになったが、してもらえないと泣いたり怒っている。

・パズルが好きで、他児が一緒にやってもいいか尋ねると、入れてあげる時もみられるようになった。怒ってダメと言うときもある。
・排泄では、一斉に行く時は嫌がり、他児が全員済んでからトイレに入る。普段は「トイレ」と言って、一人で行ったり、保育士と行ったりする。

[考　察]

ここでは、まず保育記録から読み取れることを基にして、

①本児の状態像をどうとらえるか、
②本児の発達援助をする際に大切にすべき点は何か、
③発達援助のため保育士として気をつけたい点は何か、

の三点について検討してみる。

まず①の本児の状態については、保育記録より、コミュニケーション面で「単語／二語文は出るが、オウム返しが多い」こと、行動面・対人関係面では「視線は合わない。落ち着きはなく、絵本の読み聞かせや手遊びなどの一斉活動の時、保育室におれず廊下に行ってしまう」ことなどから、こだわり（同一性保持の傾向）の有無ははっきりと読み取れないものの、自閉性障害、それも知的面・言語面での遅れが少ない高機能自閉症の可能性が高いものと推測される。

②の本児の発達援助を考える際に大切にしたい行動として、まず「保育士の手をつかんだり、引っ張って思いを伝えることもある」という点をあげたい。これは自閉性障害の最大特徴がコミュニケーションおよび対人関係の障害であることを考えれば、“自発的に相手に働きかけている”点が非常に重要であり、今後援助をする際に、本児の長所として最大限活用し、さらに活用の幅を広げていくことが望まれる。

対人関係の面では「泣いている時は、本児から抱っこやおんぶを保育士にねだる」という本児からの“自発的働きかけ”を大切にしたい。担当保育士が実践でしたように「抱っこ、おんぶをし、落ち着くようにした」というのが適切な対応といえる。また「自分のしてほしいことは言いに来ることができるようになった」という点については、保育士がタイミングよくそれに対応することに心がけることで、本児のコミュニケーションに対する意欲が高まるように、対人関係およびコミュニケーションの発達を図りたいものである。

本児の興味・関心を生かすことも大切な点である。「生活発表会（劇遊び、表現遊び［ブロック遊び］楽器、歌）の練習には参加しないことがほとんどで怒っているが、ブロック遊びだけは、ブロックが好きで、物を作り、何ができたかを発表することができた。これは練習の時から参加できた」とあるため、「ブロック遊び」に対する本児の関心をうまく活かし、本児の欲求を充足させるとともに、本児が集団に参加できる可能性を高める貴重な“道具”“手段”として利用していきたいところである。

最後に③の保育士の具体的な対応について触れておきたい。保育記録に「一人遊び又は保育士と一対一で遊んでいる。他児が“いっしょにやろう”“入れて”と誘うとすごく嫌がるため、他児には“一人がいいんだって”等、話をするようにし本児の気持ちを“代弁”し、他児にも理解してもらえるよう配慮した」とあるが、このような“代弁”という保育士の対応はきわめて重要である。対人関係・コミュニケーションを苦手とする自閉性障害の児童の不安や混乱を軽減させるとともに、他児童との関係をより適切なものとするためにも有効な援助方法といえる。

次に、本児はオウム返しが多く、コミュニケーションの点で明らかにハンディを背負っているため、「本児の分かるように話をしたり、繰り返してみたりした」という保育士の対応も適切である。特に、本児の言ったことを真似をしていってあげるという行動は、本児の発声できる音が保育士によって繰り返されるということで、真似していった保育士に本児が注目する可能性が高くなり、今度その保育士が同じ音を発したときに、本児が注目し真似する確率も高くなることが予想される。つまり言語およびコミュニケーション面での発達にもつながる対応といえるのである。

この１年目における発達援助のポイント（つまりどのような対応が本児の発達を促進したか）を、以下にまとめてあげておきたい。

(1) 本児からの“自発的働きかけ”を大切にしたこと
(2) 本児の興味・関心を生かすことに心がけたこと
(3) 本児の気持ちを“代弁”し、他の児童にも理解してもらえるよう配慮したこと
(4) 本児の分かるように話をしたり、本児の持っている語彙・音声を繰り返したりして本児の言語能力の拡張を図ったこと

（年中児）［平成X＋1年4月～平成X＋2年3月］
（4～5月）
・オウム返しが多いが、二語文・三語文が出るようになっている。トラックの乗り物を保育士にねだる時やそれで遊びたい時に、「○○くん、トラック、くるま」と言いに来るようになる。
・本児の考えているルール（順番）にそっていけなかったりすると「□□だめよ」と言い、怒ったり、保育士をたたく。また意味不明の文字（ガガギ、ガゲギなど）を並べて発するので、その後ろに続いて、真似たり、しりとりのようなことをすると、怒っていたのが収まることもあった。
・一人で遊んでいることが主だが、「入れて」「いいよ」の会話をして、同じ場所で同じ物を使って、一緒に遊ぶことも多くなる（かるた、パズル）。また猫のぬいぐるみをおんぶしたり、ミルクをあげるまねをして遊んでいる。
（8月）
・運動会の練習では、踊りの練習に関しては、クラス別にも全体の場合にも参加しない。ハンカチ（踊りの時に持つもの）を持つことを嫌がる。かけっこは積極的に参加している。保育室で曲を流している時はラジカセの方に体を向けて一人で踊っていることはある。
（9月頃）
・小学校での運動会の練習では、かけっこがやりたいので小学校へは嫌がらず行けた。しかし踊りには参加しないで、地面に何か描いている。かけっこには参加している。

《絵カード等導入》
（絵カード等を保育士が作り、パニックになりそうな時や行動が不安定になる時に使用。園長がTEACCHの研修会に参加し、保育士もTEACCHの本を読む）
（9月下旬）
・絵カードの指示が気に入らず、怒っていることが多い。たまに絵カードと同じことをする時もあった。絵カードは本児には合わない感じがして、2週間程で使用をやめる。
（10月）
・一斉にトイレへ行く時、他児がトイレを使用していると廊下で待っている。スリッパがぐちゃぐちゃになっているのが気になったり、どの色のスリッパをはこうか迷う（迷っても水色をはく）。何番目の男子トイレを使うか迷う（大抵4番目）。「何番？」と保育士に尋ねることもある。手洗い場でどの水道を使うか迷う（一番右を使用する）トイレになかなか行けないため、“文字と絵の表”を作った。表を貼ったところ一斉トイレは誰よりも先に行くようになった。
◎トイレの順番表
1　［「スリッパをはく」の文字］
　＋［スリッパの絵］
2　［「おしっこ、うんちをする」の文字］
　＋［色のシール］
→4番目のトイレと洋式トイレにシールを貼った
3　［「手をあらう」の文字］＋［色のシール］
→手洗い場の一番右にシールを貼った
（10月中旬）
・保育園の“一日のスケジュール表”を作成し、目のつく所（ロッカーの横の掃除道具入れの戸）に貼ったり、“給食当番のやり方表”を作成し、給食当番表の下に貼った。また“おやつの食べ方表”、“給食の食べ方表”を作成したところ、スケジュール表に興味を示し、よく見ている。一つひとつを確認しながらおこなったり、ひまさえあれば見ている。パニックになることが減ったり、なっても短時間になった。
（10月下旬）
・給食時、コップの色にこだわる（保育園には、白色がたくさんあり、黄色・緑色は少ない）。本児は緑色コップでないとパニックを起こす。給食の食べ方表に「コップは　白色コップでもどんなコップでもOK」と加えた。緑でないコップが配られて泣いている時は、「友達に替えてくださいって聞いてごらん」と伝えたり、がまんさせたりした。当番の子どもは、「R君は緑コップがいいだって」と緑コップを配っている。
（11月上旬）
・給食時、何色コップでもよくなった。「白色コップよ」と白色コップを喜んでいる。
（11月中旬）
・トイレで男子トイレ5番目、スリッパの青色を使用し、こだわりが減ってきたみたい。ズボン・パンツを下ろして排尿しているので、4番目の男子トイレのところに、「ズボン・パンツ下ろしている絵×」、「下ろしていない絵○」、を貼り、“母にも同じものを渡し、家庭でも利用してもらうようお願いした”。
（11月下旬）

・（登園時母親より）「朝、家でズボン・パンツを下ろさず排尿ができた。排便時、便器に座ってブツブツと独り言をいっている」（新幹線ビデオのセリフ等）との報告あり。トイレは安心できる場なのかもしれない、と感じた。
・登園後の行動パターンが決まってきた。当番表を見たり、「今日は○日、○曜日よ」と知らせてくれる。当番表、保育園の一日の表をよく見ている。
・生活発表会の練習では、昨年同様、練習時は本番の様にカーテンを閉めて、何度もやらず、基本的には一度のみにした。遊戯室の使用できる時間が曜日により違うので、“曜日別のスケジュール表”を作成し、一日のスケジュール表の横に貼った。劇には喜んで参加。ストーリーの順番も覚えて、他児を引っ張っていく勢い。

(12月)

・生活発表会前日に、明日の服装を絵と文字で知らせ、プログラムを壁に貼った。当日は参加できた。本児の調子がよいので、年末には本児に確認をとり、一日のスケジュールなどをはずした。

(1月上旬)

・保育所が始まり、朝からパニックになる。給食時同じ子の隣に座りたがり泣く。他児がゆずってくれたり、困ったりしているため、一日のスケジュール表、お当番表を元に戻す（トイレの表・絵はなくなったのでなしとした)。また“隣に座る人カード”を作成し、一日ずつめくることにしたところ隣に座る人カードを見て、「○○くん、いっしょに座ろう」と誘っている。
・登園し、支度した後、必ずすごろくをする。「すごろくやろう」と、保育士を誘う。保育士と他児と複数で遊んだり、保育士なしで遊ぶこともある。何度もあきずにやっている。子ども同士で遊べるものは、すごろく、ままごと、かるた（読む人）など。

(1月)

・生活習慣では、寒いのに半ズボンをはいている。足の色がおかしくなっていたり、戸外へ行きたがらない。長ズボンははけないので、「○○くんも○○ちゃんも長ズボンであったかいね」など他児をほめるようにしていると、長ズボンがはけるようになる。またズボンの中にシャツが入れられるようになり、保育士に見せに来る。今まではしめつけられる感じが嫌でシャツを入れられなかった。
・帽子を持って帰るかどうか気になり、必ず尋ねるため、スケジュール表のおやつからを少し書きかえ、帽子をもって帰る日を記入したところ、尋ねなくなる。
・トイレは、保育士とうまく一緒に行ったりすることが増える。

(1月)

・卒園式の練習では、“座席表”、プログラムを作成し貼ると、参加できた。

(3月)

・卒園式当日、参加出来ず、保育士と二人で保育室に行き、そこでオセロをして過ごす。
・長期の休みになるので、母親にカレンダーでもなんでもよいので、見える所に分かっている予定（今度保育所に行く日など）を書いておくといいではないか、ということを伝えた。

[考　察]

4月には、「本児の考えているルール（順番）にそっていけなかったりすると、怒ったり、保育士をたたく。また意味不明の文字（ガガギ、ガゲギなど）を並べて発するので、その後ろに続いて、真似たり、しりとりのようなことをすると、怒っていたのが収まることもあった。」とあるように、本児の持っている言語、発声を保育者が模倣することが本児の情緒安定につながっている。このように、保育者が本児の出来ること、この場合本児が言える言葉、発声を模倣をするという“逆模倣”や“拡張的逆模倣”(3)を活用することで、本児とのコミュニケーションが取りやすくなり、情緒的な安定をもたらすという効果を生み出している。

遊びでは、一人遊びが主だが、「入れて」「いいよ」の会話をして、同じ場所で同じ物（かるた、パズル）を使って一緒に遊ぶことも多くなる。また猫のぬいぐるみをおんぶしたり、ミルクをあげるまねをして遊んでいるという姿には、“象徴的模倣”ともいえる面がうかがえ、本児の発達の一端をみることができる。

小学校での運動会の練習では、かけっこがやりたいので小学校へは嫌がらず行けたが、踊りには参加しないで、地面に何か描いている。かけっこには参加しているということで、「好きな活動」という条件付きではあるが、集団行動もある程度できるようになっている。

そして、9月にはよいよ、「絵カード・文字カードの導入」が始まり、視覚的な刺激の活用をはじめとした“構造化”等により、分かりやすい環境設定が試みられ、本児への援助の方法において、大きな

転換期を迎えたといってよいであろう。

10月には、「トイレになかなか行けないため、文字と絵の表を作った。表を貼ったところ一斉トイレは誰よりも先に行くようになった。」という記録のとおり、“文字と絵”を組み合わせた視覚的刺激が本児にとって分かりやすい指示となり、行動する際に大いに効果のあることがわかった。

次に、「保育園の一日のスケジュール表、給食当番のやり方表、またおやつの食べ方表、給食の食べ方表等を作成したところ、スケジュール表に興味を示し、よく見ている。一つひとつを確認しながらおこなったり、ひまさえあれば見ている。」ということで、本児にとっては、文字や絵という視覚的刺激による確認により“見通し”が持て、安心できる環境が整ってきたといえる。その結果「パニックになることが減ったり、なっても短時間だったりするようになった。」という結果をもたらしている。

11月には、給食時、何色コップでもよくなったり、トイレで男子トイレ５番目、スリッパの青色を使用したりと、“こだわり”が減ってきていることが報告され、本児の環境への適応力が徐々にではあれ、ついてきていることをうかがわせる。

さらに、生活発表会の練習で、遊戯室の使用できる時間が曜日により違うので曜日別のスケジュール表を作成し、一日のスケジュール表の横に貼ったところ、劇には喜んで参加し、ストーリーの順番も覚えて他児を引っ張っていく勢いがあったということで、本児の障害特性を考慮した環境設定が効果をもたらしていることをうかがわせる。

12月の生活発表会では、前日に、翌日の服装を絵と文字で知らせ、プログラムを壁に貼ったところ、当日は参加できたという。TEACCHに基づいた環境設定により、本児は環境に対する“見通し”が持ちやすくなり、集団活動への参加についても着実に力をつけてきているといえる。

ところがお正月休みが入り、１月に保育所が始まると、朝からパニックになっている。給食時、同じ子の隣に座りたがり泣いたが、他児がゆずってくれたり、困ったりしているということで、環境の変化を苦手とする本児の障害特性がよく出ている。それでも保育士が「隣に座る人カード」を作成し、一日ずつめくることにしたところ、「隣に座る人カード」を見て、見通しがもて安心できたのか、「○○くん、いっしょに座ろう」と誘うようになっている。

生活のリズムが保育園から家庭へと変わったことで、再度保育園のリズムに戻すのに時間がかかるという点をみると、めざましい発達をしていても、本児の障害特性そのものは“ひとつの個性“であるかのように変化しずらいものであることが明らかになると同時に、“分かりやすい環境設定”にこころがけ、絵やカード等を活用することで、本児は見通しを持ちやすくなり、行動が安定化したことが、ここでも再認識できたのである。

生活習慣の面では、寒いのに半ズボンをはいていることが見られた。長ズボンははけないので、「○○くんも○○ちゃんも長ズボンであったかいね」など他児をほめるようにしていると、長ズボンがはけるようになる。またズボンの中にシャツが入れられるようになり、保育士に見せに来る。このように生活習慣面でも明らかに適応力がついてきていることが認められる。さらに、ズボンの中にシャツが入れられることを保育士に見せにくる点は、対人関係での相互作用に弱さを持つ自閉性障害の児童にとっては特に重要で、愛着関係を含む対人関係面での成長として評価できる。

１月から始まった卒園式の練習には参加できていたが、３月の卒園式当日は参加出来ず保育士と二人で過ごすことになったという点をみても、まだまだ取り組まなければいけない課題も多いといえる。この後保育園は長期の休みになるということで、保育士が母親に、カレンダーでもなんでもよいので、見える所に分かっている予定（今度保育所に行く日など）を書いておくといいのではないかということを伝えているが、これまでの休み明けの状況からみてもきわめて適切な対応といえよう。

このように２年目での本児の変化には注目すべき点がいくつも認められるが、その変化に大きく寄与したと思われる要因を、以下に要約してあげておく。

(1) 本児の持っている言語・音声を保育士が模倣（逆模倣）したり、さらにそれを広げて模倣（拡張的逆模倣）したりしたこと

(2) 本児とのコミュニケーション等を促進するために、“絵カード・文字カード”などの導入を図ったこと

(3) 上の(2)にも関連するが、本児に分かりやすい、見通しの持てる環境設定をするため、“スケジュール表”などを活用したこと

（年長児）［平成X＋2年4月～平成X＋3年3月］

（4月中旬）

・保育園職員の異動という環境面での変化もあり、また年少児がまだ園に慣れておらず部屋でみんなと一緒に給食が食べられず廊下で食べる子がいたため、それを本児が見て廊下で食べるという。年少児1人と本児と保育士で廊下で食べる。

・トイレは、活動の前などに排尿に行くとズボンに尿がつき失敗してしまうことが多いため、一斉に行くことを無理にさせず、本児の行きたい時に行かせるようにした。

排便は一人でも行ける時もあるが「おなかが痛い」など保育士に伝え、一緒にくるようにせがむこともある。「あま色の髪の乙女」を一緒に歌うようにせがむ。歌うと安心する。トイレットペーパーをひもを使って計り、折ってちぎって拭く。一人で拭くことができる。○とか×とか声に出し、確認している。

（6月）

・スケジュール表は今日の献立など自分の好きなものを書くことが多い。「かきかき」とスケジュール表を書きたがる。

（7月上旬）

・お帰りの時、季節の歌をうたった後、お帰りの歌をうたうのだが、それまでは廊下のベンチにいることが多い。お帰りの歌が始まり、自分で急いで保育室に入り、自分の並ぶ所に行くことができた。

（7月下旬）

・部屋替えをすると、最初は怒っている。そこでロッカーの名前をはがしたり、タオルかけの名前をはがす手伝いを頼んだり、スケジュール表をいっしょにはがして貼りかえることを頼む。保育士と一緒に名前をはがすうちにおだやかになる。他児が部屋を移動すると素直に道具箱やカバンを運び、新しいロッカーに入れることができた。スケジュール表、当番表など自分で貼りかえた。

（8月）

・午睡の時間に本児は「お勉強」となっているのに騒かしいので、園長に「騒がしいならお昼寝してください」と強く言われ、遊戯室に来る。静かに布団でごろごろしているが、他児が少ししゃべると、「シー」と注意する。

（9月）

・園庭で踊りの練習をするため、カレンダーに書いて知らせておき、今日のスケジュールも本児を隣に座らせ書いた。しかし、練習を「やりません」と戸外に出たがらない。「やらなくてもいいから外においで」と、戸外に引っ張って出す。練習後お茶の休憩をするのだが、「踊った子だけにお茶があるよ」と伝えると、「ぼく踊った」と言うので、保育士は「やらんかったじゃん」と言うと、怒って、すねて玄関の所で寝そべっている。「明日からみんなと踊ってくださいね」と声をかけると、本児は「わかった」と言い、お茶を飲みに来る。

・翌日、踊りの練習を他児を一緒に行った。退場する時、地面に引いてあったラインを気にしている。小学校の校庭で練習をする（前日に口頭で「明日小学校に行って踊ろうね」と伝えておいた。カレンダーにも書いて知らせてある［カレンダーに月末に次の月の予定を書き貼りつけている］）。他児と一緒に参加することができた。

［年齢別クラス編成実施］

・月曜日の「おはなし会」が他児と一緒に並んで参加できるようになった。

・お帰りの支度をしたら、お帰りの部屋の自分の場所（4月の時ビニールテープで貼りつけておいたが、今ははがれている）に座り待っていることができる。廊下のベンチにいたりすることはなくなった。

・登園後、支度をして、保育士は本児の横で一日のスケジュールを書き、本児は今日の献立を塗りえペンで色分けしながら書いている。スケジュール表を一日の途中で書くことはなくなった。

（9月中旬）

・運動会予行練習。運動会などいつもと違う行事はカレンダーで知らせ、さらに細かいことは少し前に書いて知らせた。機嫌良く、運動会の服装で登園することができた。保育士が「おはよう！」と声をかけると、「今日は予行練習。小学校だもんね」と言う。今日のスケジュールを書き、小学校へでかける。開会後、行進や校長あいさつなど、静かにすることができる。短距離走のピストルがなると、「こわい」と保育士の後ろにかくれる。踊り、かけっこなど嫌がることなくできた。

・翌日、登園後スケジュールを書く。運動会の練習のスケジュールを書いている。途中で、「もちひろい」に行くことに変更したため、保育士がペンで横線を引いて、変更する所を消す。新しいスケジュールを伝える。急がせたり、省略させたり、手伝ったりしたが、パニックも起こらず、支度をすることができた。

（9月下旬）

・運動会当日。事前に運動会の日のスケジュールと服装の書いてある紙を壁に貼った。同じ物を家に持ち帰ってもらった。元気に登園ができた。ズボンのポケットに家へ持ち帰ったスケジュールが入っていた。運動会が始まる前に見たりしていた。競技を見ている時に、スケジュール表を一緒に見て確認していた。開会式、かけっこ、親子競技、そして昨年は参加出来なかった踊りなど、すべて練習のように上手にできた。

・交通安全パレード当日。事前に月のカレンダーで知らせた。前日に口頭で「明日こちかめの両さんになるよ」と警察官の服装になることを伝えた。前日は喜んでいたにもかかわらず、当日の朝、「両さんに給食食べた後なるよ」と伝えると、「やりません」と少し怒る。スケジュール書いている時も、本児が「あそぶ？」と尋ねるので、「交通安全パレードだよ」と答えると、その通りに書いていた。給食前、「パレードやろうね」と声かけすると、「やりません」と言う。しかし、給食後、うれしそうに警察官の服装に着替えた。パレードではニコニコと楽しそう。

（10月初旬）

・散歩に行く時、保育士と手をつないで行く。救急セットの入ったリュックを背負いたいと言うが、すでに背負う人を決めてしまったので、「帰りならいいよ」と伝える。

　ダメとわかると泣いて保育士に抱きつく。怒りながらも出発。怒って手をはなし、どんどん行こうとする。飛び出したり、どこかへ行ってしまいそうで危ないので、リュックから消毒液を一つ出して渡すと、怒っているのが収まり、とても楽しそう。

・保育実習生の部分実習で、製作が行われた。本児は椅子に座っていられるが、分からなくなったり出来なくなると、後ろで見ている担任に振り向いて「やって」「わからん」と頼む。保育実習中なので「(実習生の) T先生に言ってね」「T先生に聞いてみてね」と返事をしたところ、T先生に分からないところは尋ねるようになる。

（11月上旬）

・交通広場へ行く予定だったが、雨天になりそうなため中止(前日にマイクロバスに乗って行くこと、信号機や三輪車があることを書いて知らせる)。当日の朝、中止になったことを口頭で伝える。一応雨が降っているので納得した。

・生活発表会に向けての練習（劇「ごきげんななめのてんとうむし」のてんとうむし役をやる)。最初「やりません」と遊戯室にも入ってくれず参加できない。参加しなくても、その場におれるように（少しの間でも）遊戯室に連れていったり、早めにてんとうむしの衣装や小道具を用意した。その後、小道具のありまきができて練習で使用する段階になると、「練習するよ」と言えば、進んでありまきを用意し、参加するようになる（本児の仕事のような感じで、いつも用意してもらうように頼んだ)。セリフや順番をよく覚えている。

・「ややこし」の練習。最初はやらずに他児のしているのを見ていた。あまり無理をせず、「見ててね」と伝えるようにした。そして遊戯室で練習を始めると、進んで練習するようになり、その後保育室、廊下などでも行えるようになった。

（12月上旬）

・生活発表会本番（前日に当日のスケジュールを渡したり、渡したものと同じものを掲示しておいた。スケジュールの中に、他のクラスが発表している時は、着替えでビデオを見て静かに待っているように「文字と色つきの絵」を記入した)。途中までは調子よくいっている。「火の用心のうた」が始まる少し前まで、ハッピを着てビデオを見て静かに待っていたが、あと少しというときにビデオが終わり、集中していたものがとぎれる。保育士に「今日の献立を変えてください」と言いに来るので　「後でね」と言うと、自分の希望が通らなかったので、怒ってパニックになり、「ハッピ着ません」と脱ぎ出す。「火の用心のうた」は不参加。その後の劇と終わりの言葉の出番があるが支度ができない。他のクラスの劇で使用した「かぶ」が廊下においてあったので保育士が「かぶ」をひっぱり「Rくん、手伝ってー」と呼ぶと、怒ってはいないが来ない。もう一度「ごきげんななめのてんとうむしさーん」と呼ぶと、「はーい」といって来る。本児が「かぶ」の所まで来るが、衣装を着ていないので、着てからやるように伝えた。急いで衣装を着替えに行く。パニックはすっかりおさまり、劇と終わりの言葉とも参加できた。劇「ごきげんななめのてんとうむし」の途中で、他児がセリフや順番を間違えると、それを大きな声で「ちがう、ちがう」と指摘する。

・戸外遊びで、ドッジボールに誘うが、「やりたくない」と三輪車やぐるぐるじゃんけん、電車ごっごなどで遊んでいる。その後も、「やりたくない」

と言うかもしれないが、毎日ドッジボールをやるか尋ねた。「やる」と言って参加するようになる日もある。内野にいて、ボールが当たって外野に出るとき、うれしそうに「やったー！」と言っている。保育士が「残念ー」と、残念そうな顔をみせた。ルールが分からないが、途中で止めたりせず最後まで参加している。外野にいてもボールを取ったり、見ていたりしている。

・室内遊びで、かるた、すごろくで遊んでいる。保育士に「すごろく」と言い、誘ったりする。「友だちを誘ってやったら？」と言ったり、「すごろくやる人～？」とやる人を誘う。3～4人で行えるように（保育士も入れて）やる。かるた、すごろくなど、どの遊びも、思う通りにならないと「違う」などと言い、怒ったり、直したりする。

(12月中旬)

・園で実施された訪問療育相談で以下の助言を受ける。

(1) パニックになっても、パニックの時間が短かったり人を叩く回数が前より少なくなったら褒める。

(2) ズボン・パンツがおしっこで、1～2滴濡れて着替えたがった場合、替えずに我慢出来たら褒め、少しずつ替える回数を減らすようにする。

(3) 我慢する経験をさせる。

(4) 行事などは参加しなくても、その場所にいるのみでもよい。

・給食の汁物が少しこぼれて服にかかり「替える」と言うので、給食が終わってから替えるように伝える。少し怒るが、替えずに給食を食べていたので、「替えずにえらかったね」と褒める。

(12月下旬)

・年末休みに入る前に、1月のスケジュールを早めに掲示した。母親にも家のカレンダーなどに、いつ保育園に行くかなど、書いて知らせておくとよいのではないかと伝えた。

(1月初旬)

・元気よく登園。保育士に1月のスケジュール表の1月3日のところに「ボーリングに行くって書いて」と頼むと、言われた通りに書く。誰と行ったのか保育士が尋ねると、「Mちゃん［姉］と、Nちゃん［姉］とお父さん、お母さんとRの5人だもんねー」という。

(1月下旬)

・発育測定で支度後スケジュールを書こうとするので、スケジュールを書く前にトイレに行って、発育測定をするように誘う。スケジュールを書く前にトイレに行き、発育測定をした。

・遊戯室で自由遊びをしながら、保育士と子ども一対一で、かた結び、リボン結びを練習。本児を誘うと「できない」という。やってもいないのにできないと言うので、「教えてあげるでやろう」と誘い、かた結びをやる。保育士が「できるじゃん」というと、「できた」と喜ぶ。

・室内遊びで、すごろく、郵便屋さんごっこ、かるた（取る人、読む人）をやりたがる。保育士に「おやつすごろく［すごろくの名前］」と言い、一緒にやりたいことを単語で伝えにくるので、「おやつすごろく、やろうっていうんだよ」と教える。保育士と一対一、又は保育士をまじえた子ども2～3人となら、すごろく、かるたができる。子どものみでかるたをしている中に入っていけない。

・排泄では、洋式トイレで保育士がついていなくても、一人で大便をすることができる。保育士に「うんち」と言ってから行き、時々個室の中から「先生」と呼ぶので、「はーい」と返事のみする。又うんちの時、大きな声で「うんち」と言うと恥ずかしいので、小さい声で言うように、小さな声で伝えた。すると小さい声で「うんち」と保育士の耳元で言う。

(2月中旬)

・竹馬（補助付きのもの）に乗り地面にラインの描いてある所で「先生ヨーイドンしよう」と保育士を誘うので、竹馬に乗り一緒に歩く。本児より保育士が前に行くと「待って」「動いちゃダメ」と言う。保育士が「止まっとると、落ちちゃうよ」と伝え、「どこがゴール？」と尋ねると、「滑り台ゴール」と言う。保育士が滑り台の所まで行き、タッチをして、他児からの声かけに応じて行こうとすると、「ダメダメ、一番じゃありません」とパニック。「先に先生がついただで、先生が一番だよ。

(3月初旬)

・「うんち」と保育士に言うので、排便を和式トイレで行うこととした。一緒について行き、「三番目（和式）に入ってみるかー」と誘うと「できない、できない」と言うが、それでも個室に入った。「できるよ、やってみて」と励ましながら行う。ズボンとパンツの下ろす位置を知らせる。「やっぱりダメだー」とお尻を上げたりもぞもぞするので、「できるよ、すわってがんばって」と励ます。

うんちが出ると「できたよ」と喜ぶので、「よかったね」と共感した。トイレットペーパーの出し方がうまくいかない（洋式に比べて下についているので長さがたりない）ので、横に引っ張るように伝える。本児は「おる、おる、ちぎる」と言いながら、紙をたたんで切ることができ、お尻もふけたので、十分ほめ、他の先生にも本児の前で知らせ、ほめてもらった。降園時に母に知らせると、とても喜んで頭をなでてほめていた。

・［卒園式の練習初日］スケジュールに“そつえんしきのれんしゅうをする（ゆうぎしつ）”と書く。保育士が「わかる？」と聞くと「わかる」というので「ほんとうに？なにするかわかる？」と再度聞くと「わからん」という。保育証書を見せ、名前を呼んで渡すまねをしてみた。その上で、「わかった？」と聞くと、「わかった」といい、練習はスムーズにできた。

（3月中旬）

・お別れ遠足で山に登る。スケジュールは書かず、予定を口頭で伝えて出かけた。登っている最中「おべんとうは？」と何度も尋ねるので、「まだだよ」「登ってからだよ」と伝える。頂上へ行くと、天気があやしくなってきたので予定を変更して下におりてからお弁当を食べることにした。下っている最中「おべんとうは？」と尋ねるので、「雨が降りそうだで、下の文化広場で食べるでね」と伝えると、「そっかー」と納得する。

・Y神社にもちひろいに行く。もちひろいでは、もちを4つひろい、景品ももらうことができた（今までは1つひろって満足していた）。

・［卒園式練習］今までに“楽しかった思い出”を「I神社に行ったことです。おもちを1つひろいました」と言っていたのが、今日から「Y神社に行ったことです。おもちを4つひろいました」に変えた。

（3月下旬）

・［卒園式練習］園児服を着て行う。登園後スケジュールを書き、“そつえんしきのれんしゅう（ほんばんみたいに）”と書くが、“ほんばんみたいに”が気にいらず消しゴムで消す。時間になり遊戯室へ他児は行くが、本児は「かゆい」と言い、行けれないので、保育室で写真を見たりして、気をまぎらわそうと接するがなかなか遊戯室へ行ける感じにならない。それでも遊戯室へ連れていくと、ズーと幕を閉めるひもの所にいる。「すわって」と頼むが、「できない」という。そこで「ただすわっとるだけでいいよ」というと、座ることができ、参加できたので、練習が終ってから「できてえらかったね」とほめた。

・［卒園式練習］主任保育士が礼服を着て、コサージュをつけて行う。本児は練習に参加できた。幕をしめる係をしてもらった。お帰りの時に「明日はどんな服を着るの？」と尋ねると、「園児服」と答えるので、「お母さんは？」と聞くと、「黒」という。卒園式の会場を途中だが見せる。

・［卒園式当日］登園時、にこにこして調子がよい。半ズボンも白靴下も調子よくはきかえることができた。コサージュもつけれた。卒園式の会場（遊戯室）を一緒に見に行こうと誘う。「幕をしめてね」と頼むと、「はーい」と幕をしめる。卒園式は上手に参加することができた。式が終わると、「ズボンは？」と尋ねるので、「脱いでいいよ」というと、ズボンをはきかえ靴下を脱いだ。一日調子よく過ごすことができた。ちなみに、お母さんの服は「黒」ではなく「グレー」であった。（卒園式数日前から、当日本児が着る服装を家で母親が見せて知らせていたとのこと）

［考　察］

4月は、「保育園職員の異動という環境の変化もあり、また年少児がまだ園に慣れておらず部屋でみんなと一緒に給食が食べられず廊下で食べる子がいたが、それを本児が見て廊下で食べるといい、年少児1人と本児と保育士で廊下で食べる」という状況で、かなり成長したと思われるような本児の場合でも、環境の変化に敏感であるという自閉性障害の障害特性のため、新しい環境に慣れるまでは、不安のため依存性が高まりやすく、それへの対応も含めて環境面での配慮が特に必要といえよう。

8月から9月にかけては大きな変化が認められた。本児はとても落ち着いた状況になり、運動会などもうまくおこなえたが、この点については、次のことが大きく影響したと思われる。すなわち8月末に「縦割り保育」から、年齢別保育に保育形態を変更したことにより、本児に落ち着きが見られるようになったのである。この点は昨年もこのような変化があったとのことで、同年齢集団の方が、発達水準（機能水準）もお互いに近いため、違和感が少なく、刺激に過敏な本児にとっては、了解不能な刺激が少なく、より理解しやすい集団、環境と映り、安心できると感じられたことを示していると考えられる。

次に、保育園での昼寝については、昼寝をしない場合は、遊戯室｛昼寝のための場所｝から他の部屋

{勉強のための場所} に移り、勉強をするという形をとる、つまり「物理的構造化」を図り、本児にとってより分かりやすい状況を設定している。それでも騒がしかったため園長から、「さわがしいなら、おひるねしてください」といわれたことが、きっかけとなり、遊戯室にきて、静かに布団の上でごろごろするようになっている。本児と長年（3年目）つちかってきた「信頼関係」をもつ園長の真剣に怒った顔をみたため、その影響はきわめて大きく、本児なりに申し訳ないと感じ、園長の気持ちに少しでも応えようと、より適応的な行動がとれたともいえる。つぎの日の朝、スケジュール表を保育士が書く時「おひるねしますか？しませんか？」と尋ねられると、本児は「おひるねします」と答え、昼寝をしている。布団の上でごろごろして、ぶつぶつはいっていたが、ほとんど静かにできたということであり、昼寝をするという集団生活における一つの習慣になじめた意義は、本児の今後の成長にとっても大きいといえる。

運動会の練習は、他の児童と一緒に参加している。運動会の予行練習の日、機嫌よく運動会の服装で登園することができた。保育士が「おはよう」と声をかけると、「今日は予行練習、小学校だもんね」といい、本児が見通しをもており、安定していることをうかがわせる。今日のスケジュール表を書き、小学校へでかけ、うまくできている。

もちひろいに行くためにスケジュールの変更もあったが、これにも対応出来たことは、“こだわり”の強い本児にとっては、大きな成長の証し、と考えられる。

そして運動会当日は、本児のズボンのポケットに家に持ち帰ったスケジュール表が入っており、運動会が始まる前にそれを見たりしていた。親がポケットに入れてくれたようである。開会式、かけっこ、踊り、親子競技など、すべて練習のように上手にできたという結果になっており、本児の集団活動場面における成長ぶりと感じられた。

こうして保育記録にそって本児の様子を見てくると、障害特性に関連するような課題については今後も適切な取り組みの必要性を残してはいるものの、集団活動場面等における本児の適応能力は明らかに向上しており、その結果が、パニックの減少、物事を納得するまでの時間の短縮などといった形にもあらわれている。

一方少しでも不安が強かったり、自分の思いとズレがあると、ものごとをやる前に「できない」などといって参加できなかったりしている(4)。また、少し複雑のルールの理解や想像性を必要とする活動（例えばドッジボール遊び）などへの対応は、まだまだ困難であったりする。さらに、子どもだけの集団へは入っていけず、大人の介入が必要といえる。また、恥ずかしいという気持ちがよく分からず、例えばうんちの時、大きな声で「うんち」と言うので、小さい声で言うように、教えてあげることも必要である(5)。いずれにしても、集団生活をする上で、学んでいかなければいけないこともまだまだたくさんあることが本児の今後の課題といえよう。

さて、保育園3年目における本児の発達を促進した要因をまとめておくと、以下のようになると思われる。

(1) 保育形態が縦割り保育から、年齢別保育に移行したことで、本児には見通しがもちやすい集団の中での生活となり、刺激に敏感な本児が、より安心でき、安定したこと
(2) 昼寝の時間の過ごし方について、信頼関係の出来ている園長より、あいまいではない、きちんとした対応がなされたこと
(3) 運動会など苦手とする集団活動場面においても、スケジュール表がうまく活用され本児も見通しが持ちやすかったこと
(4) 母親の理解・協力が得られ、本児に対して保育園と家庭とで一貫した対応がとられたこと

V　まとめと今後について

ここで筆者自身の経過観察（参加観察を含む）の内容を記述し、考察することで本事例のまとめとする。

まず本児が年長組であった6月の観察では、最初自由保育場面で、本児を見守れる位置にいて、“本児からの求め・自発的働きかけ”があった場合は、「信頼関係の形成」を第一に考え、とにかくそれに応じた。その流れの中で相手をしつつ、時には本児の遊びの幅が広がるような働きかけもこころみた。また時には、保育士がしばらく前に本児に働きかけたが、本児がその時は参加しなかった遊びや活動について、適当なタイミングをおいて再度筆者が誘ってみた。そして、それに“参加できた時は大いにほめること”にこころがけ、一緒に遊んだり、活動してみたりした。

自由保育場面では、主に一人で、又は観察者である筆者と、「交通安全教室遊び」をすることに熱中していた。ブロックを用い、青、黄、赤の信号に従

って、列車を動かしたりして楽しんでいた。外遊びの時間になり保育士の指示で他児は外へ行くが、本児はすぐには出て行かず、室内で前の遊びをしばらく続けていた。そのため、ここでも無理に外へ誘うのではなく、しばらく本児の相手をした。本児が満足したように見えた時、タイミングをみて外遊びに誘うとスムーズに外遊びへ移動できた。外では、いろいろなおもちゃを用途に合うように使って遊んでいた。茶碗に砂のご飯を入れ、滑り台の所に置きに行ったり、食べるまねをしていた。ケーキ（おもちゃ）をきれいに砂の上に並べ（丸いケーキの半分程度の大きさにする）、クリーム（砂）をかけたりもしていた。

しばらくして、前に保育士から誘いのあった「ポール登り」をやってみようと手を引くと、素直にその場所へ行き、本児なりにポールに登ったりしていた。途中で筆者が、「帽子を取ってくるね」などと本児の了解を得るための言葉がけをしてみると、「うん」と返事をし、その場で遊びながら、こちらがその場所へ戻るまで待つことができた。

時々、筆者と手をつなぎに来て、遊びに入る姿もみられた。

筆者が職員室で職員と話をしていると、「失礼します」といって、本児が入って来る。給食を一緒にするために、呼びにきてくれたようである。本児と保育室へ行くと、一緒に座って食べようと誘うのでその席に着いた。本児は一度座り食べ始めると、きちんと最後まで食べていた。

園長からの報告に、本児への対応について他児より少し不満の声があったというものがあった。他の園児から、本児だけが特別扱いされている、との声が出ていたため、6月19日に保護者と話合いをもち、子どもたちに本児が病気であると説明することで了解をもらった、というものであった。このような対応を、必要に応じてすることで、相互理解と相互扶助がはかられるといえよう。

今回の観察の全般的印象として、保育園側では、本児のパニックが少し多くなったことをもって状態が悪いとみていたようであったが、職員の異動等の環境的変化と本児のもつ変化に対する不安の強さとを考慮して、今日の状態をみるならば、決して状態が悪くなっているとは思われなかった。自閉症児の特徴である、外界の新奇な刺激に対する過敏傾向からしても、4月の職員異動は本児にとっては、きわめて大きな環境的変化であり、それに慣れるためには相当の期間と、適切な対応が必要と考えるべきであろう。信頼関係ができ、対人関係が安定するまでは強い働きかけをしたり、強い言語的指示を出したり、こちら側のペースで保育課題を進めたりすることは極力避け、子どもの「自発的な反応」に対して、笑顔や柔らかい音やスキンシップで反応していくという姿勢が大切であることを改めて感じさせられた。

まだまだ、友だち関係の広がりは少なく、集団場面での適応的行動は限定されてはいたが、本児の障害特性を考慮するならば、本児なりの成長は感じられた。現段階では、「本児にあった分かりやすい、安心できる環境」を整えながら対応し、本児の成長を促すことが自然である。そのように考えるならば、今回の場面での本児の動きは、決して悪いものではない。本児の自発的言動を尊重した上での、こちらからの働きかけに対しては、かなりよい反応、動きをしていたと考えられる。

いずれにしても、TEACCHプログラムでいう「分かりやすい環境設定」も、本児の場合はスケジュール表など視覚的刺激の活用、行事の場合の予行演習的な場面設定などの工夫等により、“見通し”をもちやすくなり、本児の心の安定につながっていると考えられる。

このような園側の工夫、配慮により、心の安定度は高まっているものの、集団活動等で、本児が適応できる範囲は限られているため、本児が“強い関心をもっている内容”を可能な限り取り入れてみたり、本児が“安心できると感じられる雰囲気”があることが、本児の集団活動参加への必要な条件になっているといえよう。

10月の経過観察においては、園長より8月から9月にかけては大きな変化があり、本児はとても落ち着いた状況になり、運動会などもうまく行うえたという報告があった。

本児の変化を促進した要因として大切なことは、

(1) 保育形態が縦割り保育から、年齢別保育に移行したこと
(2) 昼寝の時間の過ごし方について、園長よりきちんとした対応がなされたこと
(3) 運動会などでも、スケジュール表がうまく活用できたこと
(4) 母親の理解・協力が得られたこと

などであり、先の考察部分で説明した通りである。

2月の経過観察時の保育園側からの報告では、先回10月の時から、3か月ほどしか経っていないが、相当の変化が認められるとのことであった。

自分の予定していない事態が起きた時にも、きち

んとした説明や、適切な指示を与えることで、適切な対応が取れる場面が増えてきている。この場合でも、事前に文字や絵により、スケジュールが本児に伝えてあることが大切であった。

またパニックが起きた場合でも、適切な働きかけにより、パニックは収まり、行事等にも参加できる“柔軟性”を身につけてきている。

自閉症の障害特性である、こだわり、過敏性という点についても、少し待ったりすることができたり、我慢する力がついてきているのも大きな成長と考えられる。

そして、最も苦手とする対人関係面においても、まだ人数が多い場合は難しいが、小人数で保育士が参加すると、「ごっこ遊び」にも参加できる場面が増えてきているのは大きな進歩である。

３月の最後の経過観察では、３月26日が卒園式ということで、卒園式の練習が遊戯室で行われていたため、その場面から観察を始めた。

遊戯室の舞台の上に全卒園生があがり、「楽しかった思い出」というものを一人ひとり発表しているところであった。偶然二人目の発表者が、Ｒ君であり、その発表を聞くことができた。はきはきとした声で、「Ｙ神社に行ったことです。おもちを４つひろいました。」と発表でき、感心させられるほどしっかりしていた。その次は、全員で歌を歌う場面であったが、ここでも大きな声で歌えていた。その後、退場するという場面に移ったが、最後まで集団行動がとれており、集団からはずれていくようなことは全くなく、本児の成長ぶりを見ることができた。

卒園式の練習が終わると、園長が卒園生に対して、こちらの紹介をしてくださり、「前にも来てくださった英語の得意な先生です」と説明があった。すると、何人か児童が覚えていてくれたようで、自分たちの名前を英語で紹介してくれた。ここで驚かされたのは、Ｒ君が自発的に英語で、自己紹介をしてくれたことである。本児の能力的な高さを再認識させられる場面であった。

次に、給食の場面に参加させてもらいながら観察を続けた。ちょうど本児が給食当番だったようで、他の３人の児童と共に、皆の前に立って当番としての必要な課題をこなしていた。その途中で、本児も含め当番の４人は担当保育士より、「家の電話番号と両親の名前を皆の前で言う」という課題を与えられた。本児はなんなくその課題をこなし、かえって他の児童の方が緊張してしまうという状態であった。給食の最中も特に変わりなく、行動していたが、自分の分を大体食べたところでしばらく席をはずしていた点のみが、他の児童と少し行動パターンが違うかと感じられた。実のところは、トイレに行っていたようで本児には、ごく普通の生活パターンであったようである。

園長からは、４月から他の園児と共に地元の小学校の普通学級へあがっていくことに決定しているとの説明を受けた。今日の卒園式での本児の様子は、それが本児にとっても適当であることを裏付けるような内容のものであったといえそうである。

全体的印象を一言述べ、まとめとしたい。自閉症の児童への治療教育の分野で成果をあげているといわれるTEACCHの考え方を保育場面に活用してきた本保育園での実践が、今回の観察場面における本児の活動の様子の中に、十分過ぎるほどあらわれており、本児の頼もしいほどの成長ぶりにつながっていることを十分確認することができた。

今後の課題としては、３年間にわたる保育園での援助の成果が小学校という新たな課題を含む授業場面で、どのように生かされていくのか、また障害特性に関連した本児のもつ課題がどのように克服されていくのか、そして本児が小学校という新しい環境にどのように慣れていき、どこまで適応していけるのか、などがあげられる。

【参考文献】

(1) 竹田　契一：軽度発達障害とその幼児期の特徴，発達，ミネヴァ書房，No.97，Vol.97，2004

(2) 藤村　出他：自閉症のひとたちへの援助システム－TEACCHを日本でいかすには－，朝日新聞厚生文化事業団，1998

(3) 山本　淳一：自閉症児のコミュニケーション支援，発達，ミネヴァ書房，No.92，Vol.23，2002

(4) 財部　盛久：母子関係発達支援の立場から，そだちの科学，日本評論社，2003

(5) 高橋　　修：自閉症児のコミュニケーション，発達，ミネヴァ書房，No.92，Vol.23，2002